

【俊寛】 しゅんくわん

俊寛(1143?-1179)は平安時代末期の真言宗法勝寺の執行、村上源氏出身で後白河法皇の側近でありました。

安元 3 年(1177) 俊寛は平家打倒を企てて鹿ヶ谷の陰謀に加わり、密告により捕らえられ、藤原成経・平康頼と共に鬼界ヶ島に流されました。

神は時として非情な運命のシナリオを用意することがあるようです。俊寛の名を後世に残した悲劇は、実はここから始まるのです。

流罪の翌年、高倉天皇の中宮徳子(清盛の娘)の安産祈願の恩赦により成経と康頼は赦免となりますが、赦免状には俊寛の名はなく、彼は島に独り残されたのです。

御赦免船を見送る彼の孤独感は如何なるものであったのでしょうか。

『平家物語』によれば、この時俊寛は出航する船の綱にとりつき、腰が海水に浸かりながらも、せめて九州までと乗船の許しを請い続けるのでした。

聞き入れられず、なおも「是乗せてゆけ、具してゆけ」と渚で足摺しながら沖へ離れてゆく船に向かって叫び続ける姿は、幼児が乳母や母の後を慕う姿のようであったということです。

翌年、彼は南海の孤島で孤独な生涯を終えるのでした。

彼の悲劇は『平家物語』のほか『源平盛衰記』『愚管抄』などに記され、世阿弥の謡曲『俊寛』・近松門左衛門の『平家女護島』、さらに近年では芥川龍之介・菊池寛の小説にも採り上げられています。

なぜ、彼は恩赦に漏れたのか。『平家物語』では陰謀は彼の山荘で行われたと記され主謀者である印象を持たせています。しかし、より史実に近いと目される『愚管抄』では陰謀の場は静賢の山荘であり、特に主謀者とする根拠は見つかりません。

そもそも鹿ヶ谷の陰謀は、法皇側近の反平家勢力排除を目的として謀られた疑獄事件の可能性があると説く歴史家もいて、真相は明らかではありません。

疑獄事件であったか否かはさておいて、この事件を契機に後白河法皇の幽閉、以仁王による平家討伐の令旨、源頼政らの挙兵、さらに頼朝の挙兵と一気に事態は動くのでした。振り返れば平家が滅亡へ向かう契機となった事件といえるのではないのでしょうか。

三井記念美術館に重要文化財黒楽茶碗 銘「俊寛」があります。国宝 志野茶碗 銘「卯花墻」・重要文化財 唐物肩衝茶入銘「北野肩衝」と並んで同館蔵の白眉といえましょう。

この黒楽茶碗はいわずと知れた長次郎作の名碗です。

銘の由来は、利休が薩摩在住の門人の所望により長次郎の茶碗を三碗送ったところ、この茶碗を除く二碗が送り返されたところから、一つ残された経緯に因みこの銘が付けられたということです。

箱裏にはこの伝えを踏まえた仙叟宗室の狂歌が書かれています。

この碗の箱蓋表のほぼ中央に利休筆と伝えられる「俊寛」と書かれた紙が張られています。ご承知のとおり、長次郎の茶碗の銘はほとんどが後世の千家流家元による銘です。もしこの張り紙が

真筆ならば、利休自身が名付けた長次郎茶碗の数少ない例ということになるのですが…。

かつて知人から、長次郎の作品の中で何が一番好きかと問われたことがありました。「無一物」か「大黒」か「俊寛」か…、もうひとつ楽美術館蔵の「獅子瓦」も候補に入りたいところです。あの瓦の躍動的造形が「俊寛」に見られるように思います。

うっすらとした胴の篋跡、黒釉の鈍い光沢、内側に抱え込みながら押しえ気味に水平を崩した口造り・高台脇の変化など動きのある美しい姿の楽茶碗です。

そして、深刻なまでに緊張感漂う雰囲気は銘「俊寛」に相応しい名碗といえましょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~